

四月四日（火）

一輝さんは沙綾が置いて行ったコビトカバの大きなぬいぐるみに微笑んで、私に車のキーを差し出した。

「娘の彼氏を運転手にしちゃって、ごめんなさい」

彼に椅子を勧め、その前にコーヒーを置いた。彼は「いただきます」と、カップを口元に運んだ。

「お砂糖もミルクもいらなかった？」

「ええ。いつもブラックなので」

彼は一口飲むと、少し目を丸くした。改めて香りを確かめるようにカップを鼻先で動かす、もう一口飲む。

「良かったら、何か作るけど」

彼はチラリと腕時計に目を落とした。もうそろそろ午後六時。我が家の小さな冷蔵庫に、果たして何が残っていたかを思い出す前に、一輝さんにとっても柔らかい表現で申し出を断られてしまった。

「この後、沙綾を迎えに行つて、そこから何か食べようかつて話をしてたので」

「あら、そう。じゃあ、車使う？」

さつき受け取つたキーを彼の前に押しやる。彼は手振りを交え、「いえいえ、バスで戻ります」と言った。

「バスがダメなら、モノレールでグルツと。お義母さんも行きます？」

多少の荷物があつたからとはいえ、車で行つて戻つてきた道を今からもう一往復する気力は残っていない。

「若い二人でいつてらっしゃい。おばさんは、お土産のワインとパンを楽しむわ」

さつきのパーティ会場で一輝さんが手をつけられなかった物と同じワイン、同じパンを指して、できるだけ嫌みつたらしく聞こえるように言つてやった。彼は

「コーヒーを楽しんでいた時と同じ涼やかな表情のまま、「そうですか、残念だなあ」と呟いた。

「今日は本当に、ごめんなさいね」

知人のサロンを手掛けてもらい、担当のデザイナーということでお披露目パ

ティにも出席してもらったのに、ハンドルキーパーを買って出てくれたことに甘えたばかりか、おぼさんの意地悪も意に介さずやり過ぎしてくるなんて、非常に申し訳ない。

一輝さんは鳩が豆鉄砲を喰らったような表情で、ただただ困惑しているようだった。何故か私の方が慌てて別の話題を探すべく、少ない知恵を絞り出す。

「沙綾との約束は何時だったかしら？」

「一九時頃に箕面萱野駅、とは言ってますけど、向こうの都合次第ですね」

会場で別れる時、「友達と会う」とか言ってたっけ。こんないい人をあまり振り回さないようにしなさいよ、と心の中で娘に小言を言ってみる。ワガママも美德、器量と教育してきたけど、少々やり過ぎた。

一輝さんは私のことなどあまり気にしていないようで、マイペースにコーヒーを飲み切っていた。「もう一杯いかが？」と尋ねると、「トイレが近くなるといけないんで」と辞退された。

彼はズボンのポケットからスマホを取り出し、腕時計を見ると、椅子から腰を上げた。

「もうそろそろみたいなんで、もう行きます」

彼は空のカップに目をやった。私が「そのままでもいいわ」と言うと、彼は「飲みっぱなしですみません」と軽く頭を下げた。

「コーヒー、ご馳走様でした。美味しかったです」

「そう？じゃあ、また飲みに行らっしゃい」

彼は「ありがとうございます」と再び頭を下げた。自分のカバンを持って、「じゃあ、行ってきます」とサロンへ通じる階段を静かに降りて行った。